

※CEFRとは、シラバスやカリキュラムの手引きの作成、学習指導教材の編集のために、透明性が高く分かりやすく参照できるものとして、20年以上にわたる研究を経て、2001年に欧州評議会（Council of Europe）が発表。

英語教育の抜本的強化のイメージ

資料5-3

成熟社会にふさわしい我が国の価値を海外展開したり、厳しい交渉を勝ち抜く人材の育成

※具体的な小学校の授業時数については、**年内~年明けを目途に教育課程全体の構成とともに検討を進め、一定の方向性を提示**

新たな英語教育

大学や海外、社会で英語力を伸ばす基盤を確実に育成

高校卒業レベルで3000語

高で1800語

中で1200語

現状

【高等学校】

- 目標:コミュニケーション能力を養う
- 授業は英語で行うことが基本

国の目標(英検準2~2級程度等50%)
→現状32%
・生徒の学習意欲、「書く」「話す」に課題
・言語活動が十分でない

【中学校】

- 教科型を通じた4技能の総合的育成
- 目標:コミュニケーション能力の基礎を養う
 - 前回改訂で週3⇒週4に増

国の目標(英検3級程度等50%)→現状35%
・言語活動が十分でない

年間140時間(週4コマ程度)

活動型

- 【小学校高学年】 年間35時間
- 目標:「聞く」「話す」を中心としたコミュニケーション能力の素地を養う
 - 学級担任を中心に指導

外国語活動が成果を上げ、児童の「読む」「書く」も含めた系統的な学習への知的欲求が高まっている状況

年間35時間(週1コマ程度)

【高等学校】

目標例:例えば、ある程度の長さの新聞記事を速読して必要な情報を取り出したり、社会的な問題や時事問題について課題研究したことを発表したりすることができるようにする

- 授業を英語で行うとともに、①4技能を総合型を核とした言語活動、②特に、課題がある「話す」「書く」も含めた複数の技能で発信力を強化する言語活動を充実(発表、討論、交渉、議論等)

【中学校】

目標例:例えば、短い新聞記事を読んだり、テレビのニュースを見たりして、その概要を伝えることができるようにする

- 身近な話題について理解や表現、情報交換ができるコミュニケーション能力を養う。互いの気持ちを伝え合う言語活動を中心とした対話的な授業を英語で行うことを基本とする

年間140時間

教科型

【小学校高学年】

【小学校】

目標例:例えば、馴染みのある定型表現を使って、自分の好きなものや、家族、一日の生活などについて、友達に質問したり質問に答えたりできるようにする

- 「聞く」「話す」に加え、「読む」「書く」の育成も含めたコミュニケーション能力の基礎を養う。
- 学級担任が専門性を高め指導、併せて専科指導を行う教員を活用、ALT等を一層積極的に活用

教科として系統的に学ぶため、効果的な「繰り返し学習」としてモジュール学習も活用

年間70時間 ※

活動型

【小学校中学年】

- 目標:「聞く」「話す」を中心としたコミュニケーション能力の素地を養う
- 主に学級担任がALT等を一層積極的に活用したT・Tを中心とした指導

年間35時間 ※

改善のためのPDCAサイクル

高等学校基礎学力テスト(仮称)

改善のためのPDCAサイクル

4技能学力調査 全国的な英語